

No. 7
84
20

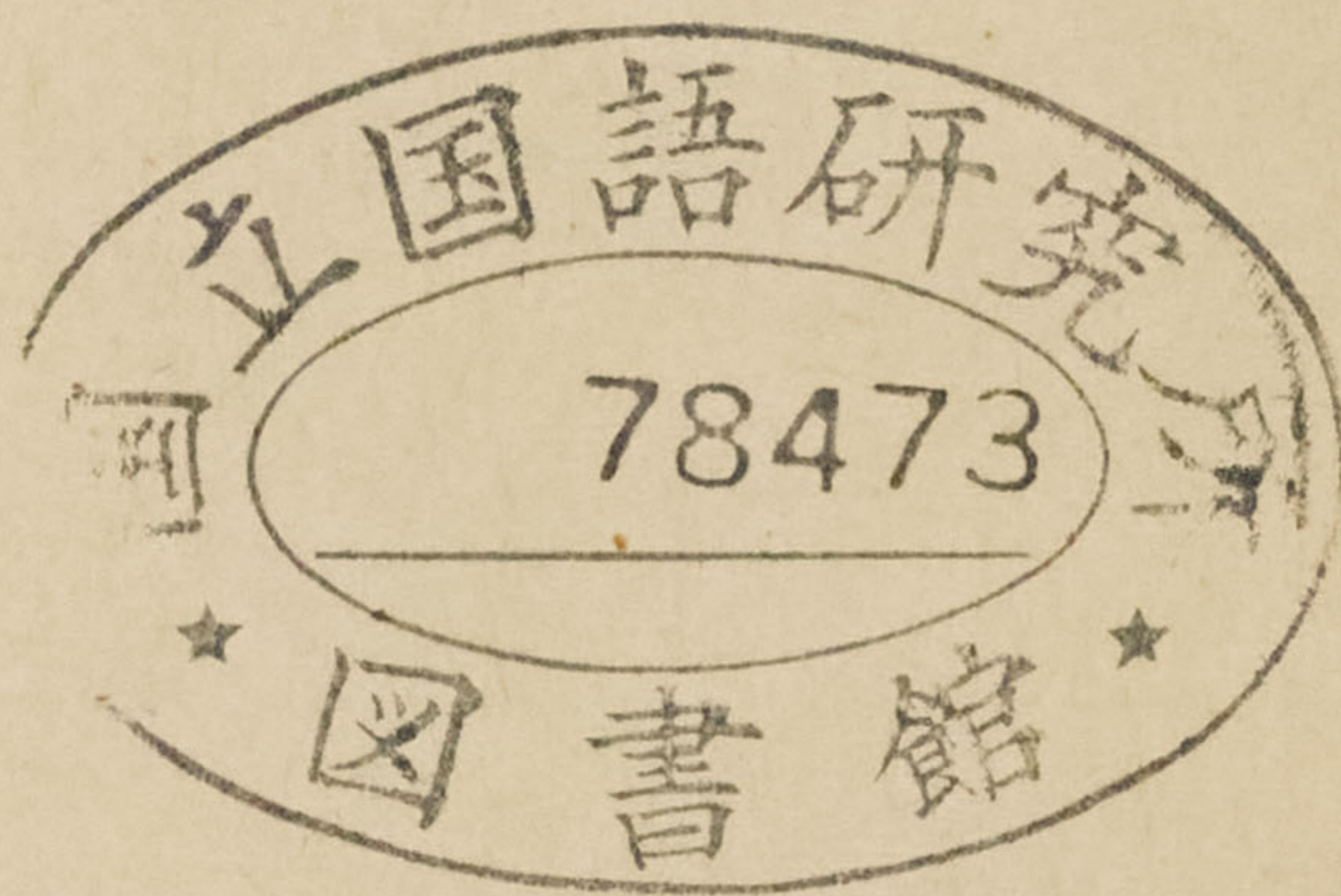
國語

第五學年

上



K
M
100

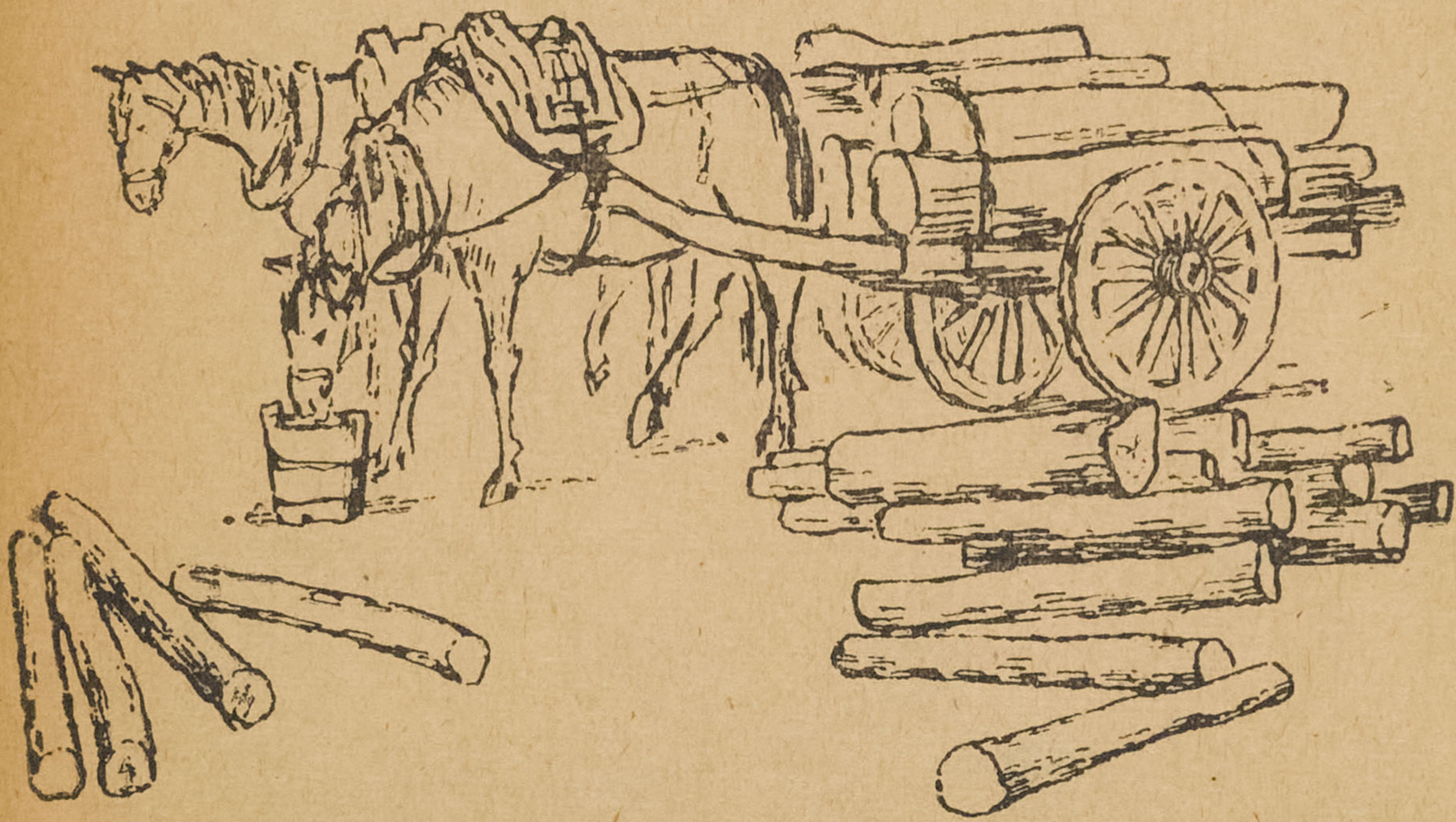


國

語

第五学年

上





もくろく

一 美しいもの……………四

二 ことばの愛……………七

少年・少女

自分の國のことば

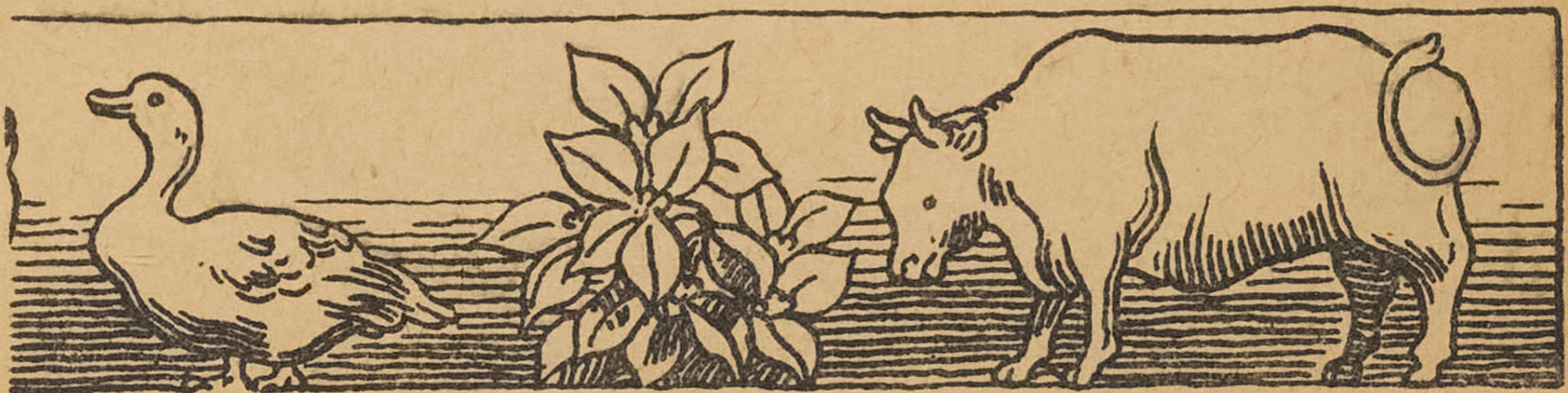
三 日の光……………十八

四 あなたの思っていることは……………二十七

(一)

(二)

(三)



五 発明二つ……………三十二



五 発明二つ……………三十二

自動織機

真珠

六 私の妹……………四十七

妹のことは

新しい世界

妹の作文

七 ぶす……………六十二

能と狂言について

狂言「ぶす」



一 美しいもの

青空の美しさ、

朝明けの空、夕やけの空の美しさ、

月の夜、星の夜の美しさ。

いまも、美しいものはどこにでもあ
る。

高い木が大きく枝をはって、

わかめをだしかけたこずえのさきが、

かすんだ空の中にとけこんでいる。

じつに美しい。

小鳥が鳴いている。



じつに美しい。

小鳥が鳴いている。

風が、かすかに耳もとをすぎる。

耳をすますと、なにか、かすかな音

樂がきこえてくるようだ。

どこからきこえるともないが、どこ

からかきこえてくる。

美しいものは、いまも、どこにでも

ある。

ただ、その美しいものを、すなおに

感じとる心を、われわれは失ってい

る。

毎日の生活のらんぎつとあわただし



さの中に、それを失っている。

しかし、われわれは、いつでも、どこにでも、その美しいものを、すなおに感じとる心を、もちつづけたいものである。心がけひとつである。

心がけひとつで、われわれは、どんなにでも毎日の生活を、ゆたかに、楽しくすることができると。



二 ことばの愛

少年・少女

おとうさんが、フランスのいなかへいったときは、子どもが大ぜい、めずらしそうについてきて困りました。そういいなかへは、めつたに日本人もいかなのです。日本人をみたことがない子どもたちは、おとうさんが通るたびに、目をまるくしました。おとうさんの歩いていくそばを、足ばやにかけぬけていって、てんでに、おとうさんの顔をのぞきこむようにしました。

こんなにいるさくついてこられたときには、おとうさんも困りましたので、子どもをさけて通ったこともありました。

しかし、おとうさんは、子どもと遊ぶことが好きですから、

道で子どもたちが、なわとびをして遊んでいたりと、そ

のなかまいりをして、なわをま

わしてやったこともありました。

二月半ばかり、いなかでくら

すうちに、おとうさんには、子

どものお友だちができました。

そういう子どもの中には、道

でおとうさんを呼びとめて、

「日本人、くりをおあがり。」

と、いいながら、おとうさんにわ

けてくれる少女もいました。

あのとげとげしたいががわれて、じゆくしたくりの実の落ちる



けてくれる少女もありません。

あのとげとげしたいががわれて、じゆくしたくりの実の落ちるころでしたから。



でした。

ちようと、プラタナスという木の葉が黄色くなるころで、いなかの子どもにとっては、もっとも楽しい季節でした。どこへ

おとうさんは、知らない外国人どうしでも、こんなに親しみをもつことができるとのかと思いました。その少女のわけてくれたくりは、むじやきな心からでた子どもらしい愛情のしるし



いっても、遊びたわむれている子どもにあいました。

そのいなかの町には、ポンナフという石の橋があつて、イエ
ンヌという川が、その下を流れていました。

岸にある丘の上には、セントチェンヌというお寺の高いとう
もみえました。

そのあたりは、フランスの国道にそつた景色のよいところで
すから、橋のたもとの休み茶屋へは、おとうさんもよくいつて
こしかけました。その橋のたもとにあるプラタナスのなみ木の
下で、おとうさんは、三人のかわいらしい少女にもあいました。
みあげるように高いプラタナスの枝からは、黄色い葉が、毎
日のように落ちました。三人の少女は、その葉をひろい集めて、
橋のたもとの石がきのところへきては、遊んでいました。おと

うさんが、休み茶屋のまえにこしかけ



日のように落ちました。三人の少女は、その葉をひろい集めて、橋のたもとの石がきのところへきては、遊んでいました。おと

うさんが、休み茶屋のまえにこしかけて、コーヒーをわかしてもらって、いますと、きまつて、その少女たちも遊びにきています。いずれも、八つばかりの子どもたちでした。

ある日のこと、おとうさんが、子どもが好きそうなおかしを、一ふくろ買ったのがはじまりで、その少女たちは、おとうさんのそばへくるようになり、ました。ひろい集めた落ち葉を持ってきて、おとうさんにくれるようになりました。

プラタナスの葉の大きいのは、やつでほどもありました。



「旅の記念として、本のあいだへでもはさんでおきたいのです。なるべく、小さな葉をくれませんか。」

と、おとうさんが頼みましたら、少女たちは、手をとりあつてとんでいって、小さなのをえらんで、ひろってきてくれました。こうして、ずんずんおとうさんのそばへきて、さまざまなことを話しかけたり、わらったりしました。けれども、お友だちにさそわれても、どうしてもおとうさんのそばへこない女の子もありました。

「おお、こわい。」

と、ひとりの少女が、おとうさんをみてそういいました。

「おいで、わたしといっしょにお話をしておくれ。ちようどあなたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國に

のこしておいてきました。わたしは、そんなにこわいもので

なたたちと同じ年ぐらいな子どもを、わたしは、自分の國に
のこしておいてきました。わたしは、そんなにこわいもので
はありませんよ。」

おとうさんがいいました。

それから、三人の少女に、歌を歌ってほしいと頼みました。

方言でできた小歌のあることを、おとうさんは、きいて知って
いましたから。

少女たちは、おとうさんのこしかけているそばで、コーヒー
茶わんのおいてあるテーブルをかこんで、いなかの歌を歌って
きかせてくれました。

なんとかわいらしい子どもたちではありませんか。あんない
なかはつまらないと、わるくいう旅人もありますが、おとうさ
んがそのいなか町がすきになつたのも、一つは、そういうかわ

いらしい子どもがいて、なかよしになつてくれたからです。

ビエンヌという川の岸には、手ぬぐいのようなものをかぶつた女の人たちが、ならんでせんたくをしていました。フランスのいなかによくみかける、赤いかわら屋根の家が、川の水にうつつていました。その川の岸で、おとうさんは、ひとりの少年にもあいました。

たぶん、その少年は、小学校のいちばん上の学年か、または、そのいなか町にある商業学校の下学年ぐらいでしたでしょう。おとうさんのそばへきて、あいさつをしてから、

「日本とフランスとは、どちらがきれいですか。」とたずねました。

この少年の間には、ちよつとおとうさんも困りました。フラ

とたずねました。

この少年の間には、ちよつとおとうさんも困りました。フランスだって、きれいなところもあり、きたないところもあり、日本も、やはりそのとおりですから。おとうさんがしようじきにその答をしたら、少年は、さらにこんなことをいいました。

「日本の海はどんな色ですか。」

「それはすきとおった青い色ですよ。」
と、おとうさんが、力をいれて答えました。

この返事に、少年も満足したらしく、
「ああ、すきとおった青い色ですか。」



と、日本の海の美しさを、思いうかべるようにいいました。フランスのいなかの子どもから、自分の國のことをきかれたときは、おとうさんもうれしく思いました。かしこそうな目つきの少年でした。

自分の國のことば

「おとうさん。」

と、太郎たろうがそばへきて、外國ではどんなことばを話すかとたずねるものですから、「そりやあ、フランスではフランスのことば、イギリスではイギリスのことばを話すよ。」と、おとうさんがいつてきかせました。

「子どもでも。」

と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

てきかせました。

「子どもでも。」

と、また太郎がたずねましたので、おとうさんは答えました。

「太郎よ、フランスでは、さかな屋さんでも、やお屋さんでも、みんなフランス語です。えんぴつ一本買いに行くにも、日本のことばでは通じません。『こんにちは』なんていったって、だれもわかるものがありません。」

そういう遠い國へいくと、自分の國のことばがこいしくなります。こうしておまえたちに話すようなことばが、思うぞんぶんつかってみたくになります。わたしは、外國でくらししてみ、つくづく、自分の國のことばのありがたみを知りました。おまえたちは、おさな心にも、ことばを愛することを知って、勉強したら、どんなにしあわせでしょう。」

三日の光

1 黒い雲が流れてくる。はげしいに

わか雨。暗い木立。

2 いけのおもてにはじける雨あし。

竹の葉さきからしたたるしずく。

その下で、きよとんとしている

あまがえる。

3 わら屋根ののきから、たきの上

うに落ちる雨水。

その下で、雨やどりをしている

にわどりのむれ。



うに落ちる雨水。

その下で、雨やどりをしている

にわどりのむれ。

4 小学校のかわら屋根から雨がしたたる。だんだんまどおになる。「ことばの愛」を読んでいる声が、きこえてくる。

5 ひとりの子どもが、立って本を読んでいる。友だちの顔、顔、顔。先生の横顔。

6 また、「ことばの愛」のつぎの一節を読んでいる声がきこえる。もうあ学校の教室である。

7 ひとりの生徒が、席にすわったまま、点字を読んでいる。ほかの生徒の指さきが、すばやく点字の上をすべっていく。オルガンがひびいてくる。

窓をあける女の先生。

「あ、きれいなにじ。」



8 村の林の上に、大きな半円形のにじがかかっ

ている。

「にじの歌」を歌う子どもの声。

9 暗室。

「さあ、その白いかべに、プリズムでわけ

た光を写してみますよ。」

という先生の声とともに、七色の光が写し
だされる。

「ただ白っぽくみえる太陽の光線ですが、

わけてみると、こんなにさまざまな色に

なります。」

10 せんとく物のほし場。

まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。

なります。

10 せんたく物のほし場。



まえかけや、しきふや、ハンケチなどが、風にゆれている。その下を、あひるがならんで通っていく。

そのあとから、小さな子どもが、よちよちと歩いてくる。

母親が、両手をのばしてついてくる。

11 病院の庭さき。

看護婦がもうふをほしている。

男の子がベッドにすわっている。

「おかあさん、雨がはれてきれいなね。」

窓に花のはちをおきながら、

「ごらん、にじがでているよ。」

窓をのぞく子どものはればれした顔。

「早く、あの野原で、遊びたいな。」

「もうじきですよ。」

「お友だち、どうしているかな。」

12
ひとりの友だちは、水へのぐで写生を
している。

光る白い雲、遠い山のみね、村の道、
やえざくらの花。

13
ひとりの友だちは、その兄といっしょ
に種まきをしている。

きれいにたがやされた畑。
田をならしている農夫。

14
ひとりの友だちは、妹をつれて、つっ
みの上でつみ草をしている。

「春の小川の歌がひびいてくる。」



14
ひとりの友だちは、妹をつれて、つづ
みの上でつみ草をしている。

「春の小川」の歌がひびいてくる。

小川の水、きらきら光る。

15
いちめんのなの花。

ひとりの女の子が、「なのはな、なのはな、まつのき」と、
「ごくごー」の文を大きな声で歌う。

自轉車に乗った中学生が、ふたりづれでなの花畑を横ぎる。

16
ひとりの友だちは、母といっしょに汽車に乗っている。

窓からみえる村の家、まつなみ木、竹やぶ。

新しい家のたった町、ふみきりばんのおじいさん。

トンネル。

17
ひらけて、海。長い海岸線、うちよせる波、おきの漁船、
島。

18

炭坑の風景。

エレベーターをあやつる大きな車輪が、まわっている。

トロツコをおして、炭坑にはいつていく工員。

ヘッドライトにたよって現場に近づく。

地下水の流れ。その流れのかすかな音。

石炭の坑道。工員たちは、さくがん機やつるはしを持って、

石炭をほっている。

19

あせまみれになった工員の顔、胸、うで。

たくましい音楽。

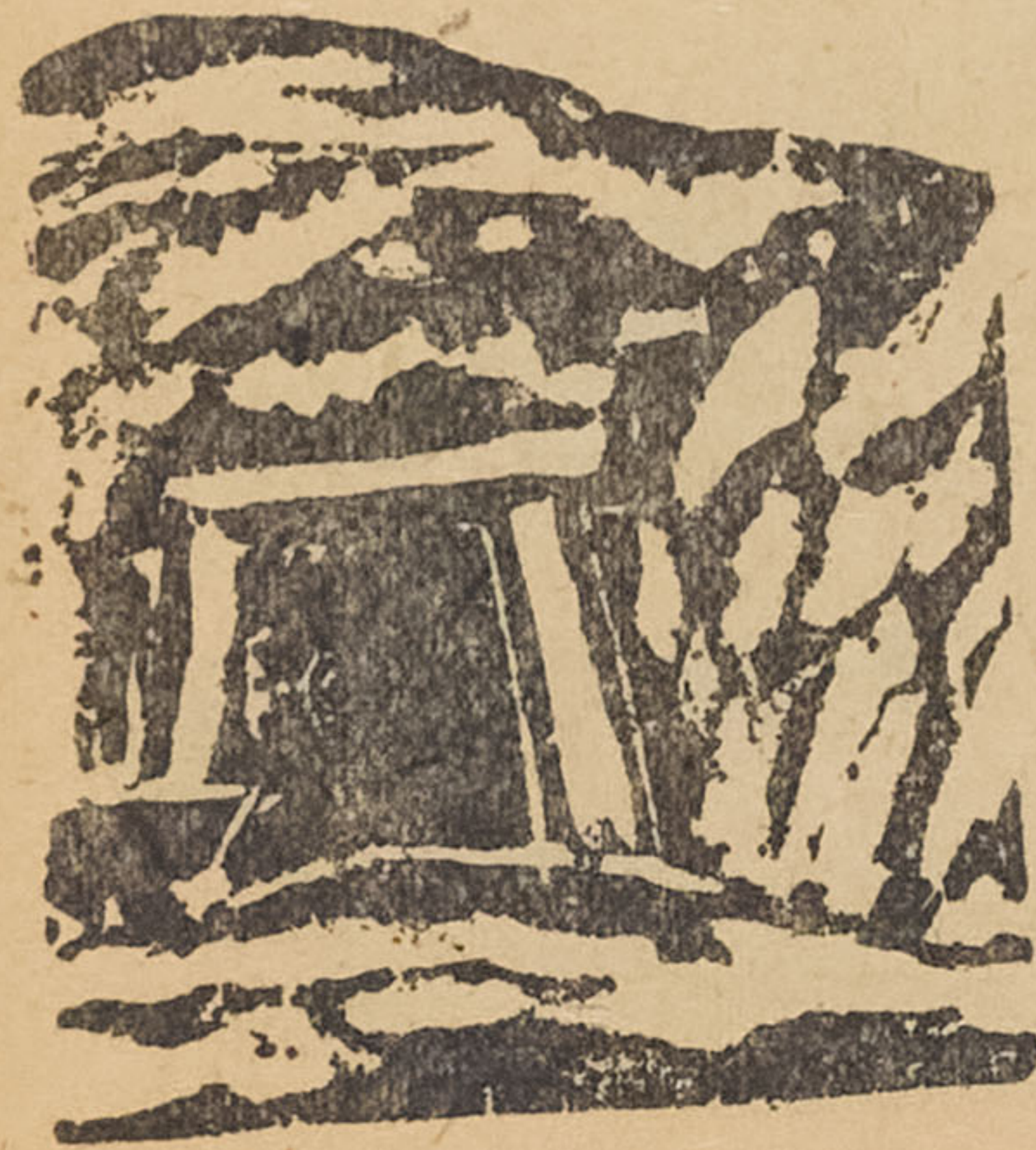
くずれくだける石炭。シャベルですくう

石炭。

20

みるまに、トロツコにつまねる石炭の山。

おしだされてくるトロツコ。



石炭。

20 みるまに、トロツコにつまれる石炭の山。

おしだされてくるトロツコ。

ごうごうたるトロツコのひびき。

21 ひとりの工員がしごとをすませて、坑内

から地上にでてくる。

まぶしい日光。

22 坂道を、ゆっくりとした足どりて、家に

帰ってくる。道ばたにさくたんぽぽ、と

びかうちようちよ。

立ちどまって、両手をひろげて深呼吸。

23 「おとうさん。」と呼ぶ声。

その声をきいて、にっこりとわらう顔。

「おうい。」



また、「おとうさん。」とさけぶ。

「おうい。」

工員も走りだす。

男の子が、むちゆうになつてかけてくる。

工員は男の子をだきあげる。

ふたりのうれしそうな顔。

日の光をいっぱいに受けた、はればれとした父と子。



四 あなたの思っていることは

(一)

ぼくは、いままでに学んだ「自然の観察」を、ずっとつづけていきたいと思ひます。

わざわざ遠くにでかけなくても、ふだん自分の身のまわりにあるものを、よくしらべてみる心がまえを、つくりたいと思ひます。庭の木に小鳥がくれば、その鳴き声や、とまりかたや、動きかたや、羽の色や、形などを、こまかにしらべたいのです。トマトが畑に植えてあれば、そののびかたや、花のさきかたや、実のなりかたなどを、たんねんにみようと思ひます。

また、くもがのきに巣をかけることがあれば、巣のはりかた

などを、しらべておきたい
と思います。

こんな動植物だけではな
く、雪のようすや、星の世
界なども、しらべていきだ
いと思います。

観察すればするほど、自
然のおもしろさもわかり、
そのふしぎなことにうたれ、
美しさにおどろくにちが
ありません。

(二)



私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなっ

私は、同じものをみるにしても、どうしてそのものがこうなっ
たかというのを、考えてしらべたいと思っています。

たとえば、毛糸のあみ物があれば、そのあみかたはどんなあ
みかたか、なぜ、このようなあみかたをしなければならなかつ
たのか、よく考えてみたいと思います。

また、一つの和音を耳に
したときは、組みあわされ
た一音一音のことも、心に
うかべてみたいのです。

もようをみたときには、
そのもようが、どんな単位
からなりたっているか、そ



れをさがしてみようと思います。

もし、弟や妹がけんかでもはじめたら、どうしてそんなことになったか、そのわけをよく考えていつてみようと思います。

このように、なんでも、そのもとのことをしらべていくような心がけを、もちたいと思います。

(三)

ぼくは、みんななどいっしょにはたらきたいと思います。

家では、弟たちのめんどうをみてやり、兄や姉の手助けとなりたいと思います。父や母のために、いつもすなおな子どもになりたいのです。

そうして、うちじゅうの入たちに、めいわくをかけないよう
にしたいと考えます。

そうして、うちじゅうの入たちに、めいわくをかけないよう
にしたいと考えます。

ぼくがいるために、うちの中が明かるくなるように、できな
いものでしょうか。ぼくがいるので、みんな楽しい氣持になる
ようにできないものでしょうか。

学校では、組の友だちとなかよくして、助けあっていきたい
と思います。かげで人のわる口をいわないようにしたいし、自
分のもっているいいところを、えんりよしないであらわし、友
だちのいいところを、すなおに学んでいきたいと思えます。

自分をえらそうにみせかけたり、人をだましたりしないで、
ありのままのすがたで、つきあっていきたいのです。

ぼくは、学校の生徒のひとりとして、りっぱにそのつとめを
はたし、自分ひとりぐらいどうでもいいというような、無責任

な、ひきような考えをもちたくはありません。

ぼくは、この学校では、かけがえのないひとりであることを、ほこるようになりたいたいものです。

いつも、全体の中の部分、部分があつての全体、というつながりをわすれないうで、あいての人をうやまうとともに、自分のつとめをはたすだけの勇気を、もちたいと考えます。

五 発明二つ

自動織機

「はたばかりいじっていて、おかしなやつだ。男のくせに。」

豊田^{とよだ}佐吉^{さきち}は、村の人々から、こういってあざけられた。佐吉

は、父の大工のしごとを助けてはたらいっていたが、ひまさえあ

は、たはかりいじつて、おかしなやつた男のくせに、
豊田佐吉は、村の人々から、こういってあざけられた。佐吉

は、父の大工のしごとを助けてはたらいっていたが、ひまさえあ
れば、織機のことをしらべつづけていたのである。

村じゅうの者から氣ちがいあつかいにされるのをみて、父は、
「おまえは大工のせがれだ。ほかのことを考えないで、みっち
りしごとをやってくれ。」

とさとしたが、佐吉のもえるような研究熱は、どうすることも
できなかつた。それで、父は、佐吉の心をいれかえさせるため
に、佐吉をよその大工の家にあずけてしまった。

このあいだに立って、佐吉をはげましたり、なぐさめたりし
たのは、母であつた。

佐吉の考えはこうである。人間の衣食住というものは、みんな
なたいせつなものであるから、ぬのを織るしごと、けっして

ゆるがせにしてはおかれぬ。いまのようなぬのの織りかたを
していたのでは、やがて、困るときがくるにちがいない。その
ために、いまのうちに、早く織機を進歩させておかなければな
らない、というのである。

佐吉が、はじめに目をつけたのは、ぬのを織るとき、たて糸
のあいだをぬっていく横糸であった。横糸はおさによつて、右
から左、左から右へといききするのであるが、これを人の手に
よらず、機械の力で動かすようにしたかった。機械で動かせば、
もつと早く織ることができるし、ひとりでに、ぬのがずんずん
織られていくからである。

佐吉の考えは、しだいに高まっていたが、小学校をでただ
けのかれには、手のとどきそうもない空想になりがちであった。

たまたま、そのころ、とうきょう東京にはくらん会が開かれた。佐吉は、

佐吉の考えは、したいに高ま……たか……
けのかれには、手のとどきそりもない空想になりがちであった。

たまたま、そのころ、東京にはくらん会とうきょうかいが開かれた。佐吉は、上京して機械館へ毎日かよった。銀色に光った、たくさんの機械は、生きもののよう動いていた。かれは、そのりっぱな機械をみて、感心するとともに、なんともいえなにかた身のせま
い思いがした。機械は、どれひとつとして、日本製のものは、
なかつたからである。

「こんなことでいいのか。日本のゆくすえをどうするのか。」

佐吉は、もう、じつとしていられなくなり、設計図をひいては組みたて、組みたてては動かしてみた。だが、思うように動くものは、なかなか生まれなかった。

佐吉は、一けんの小屋に閉じこもって、いつしんに考えぬき、これならという一台の機械を作りあげた。これも、まんまと失

敗であった。世間からはますますわらわれて、だれひとりあいてにしてくれなくなり、まずしさはいよいよせまってくる。

かれは、勇氣をふるいおこして、夜も晝もなく考えとおし、いままでの失敗のもとをとりのぞいて、新しい設計図をこしらえあげた。そこでやっど、思いどおりの機械ができあがった。ためしてみると、はたしてよく動いた。

村の人たちは、ぬのをみごとに織っていく、ふしぎな機械に目をみはりながら、

「よくやった。」

「えらいものだ。」

と、いつてほめたたえた。試運転の日、その織機をあやつって、りっぱにぬのを織ってみせたのは、佐吉の母であった。それは、

明治二十三年、佐吉が二十四才のときのことである。

と、いつてほめたたえた。試運轉の日、その織機をあやつつて、りっぱにぬのを織つてみせたのは、佐吉の母であつた。それは、明治二十三年、佐吉が二十四才のときのことである。

あくる年から、豊田式人力織機は、国内につかわれるようになったが、かれは、これに満足せず、すぐ、動力機械を作ることにとりかかった。そこでさらに、七年間のくふうがつづけられ、みごとに、自動織機ができあがつた。これが、日本における自動織機のはじめである。

日本の新しい出発にあたつても、この自動織機が、どれほど大きな役わりをはたすことであらう。

眞珠

美しい眞珠、世界じゅうの人から愛される眞珠、これを、人

工で作りだすことはできないものだろうか。

一つぶの天然真珠をてのひらにのせて、大きなゆめをえがいていた、ひとりのわか者があった。

真珠は、海のそこからまれにひろいあげられる、ふしぎな寶石とされてきたが、しらべてみると、けっして、ふしぎでもなんでもないものであった。

真珠母貝の中に、砂のような小さなものがいりこみ、それに、貝のだす真珠質がまきつき、年とともに大きくなって、天然真珠となることがわかったからである。

「このわけをあてはめれば、自分のゆめも、実現できないことはあるまい。」

それから、わか者は、真珠貝の研究に全力をつくした。

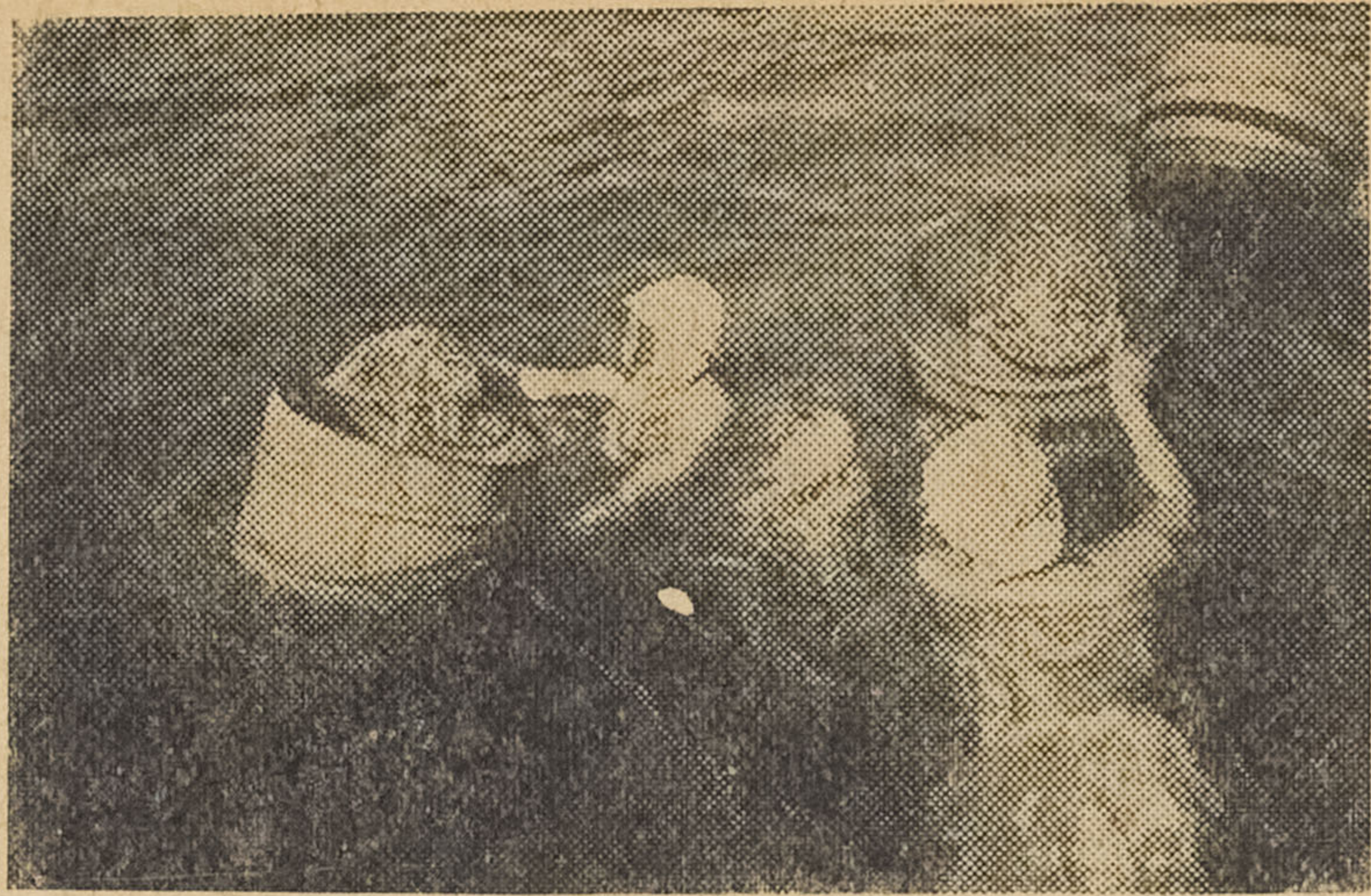
このわか者こそ、のちに真珠王として世界に知られた御木本

はあるまい。

それから、わか者は、眞珠貝の研究に全力をつくした。

このわか者こそ、

のちに眞珠王として世界に知られた御木本幸吉であつた。



なるものではなかつた。

だいいち、母貝は、その核をそとにはきだして、受けつけなかつた。また、核をさしいれたために死ぬものもあつた。たと

もし、母貝の中に、核をさしいれることができたら、眞珠が発生するにちがいない。幸吉は、あわつぶほどの核をこしらえて、それを、母貝の体内にさしいれてみた。うまく貝の中に核がのこり、眞珠質がまきつけば、成功するわけであつたが、理論と実際とは、そうやすやすと、ひとつに

え、はきだしもせず、死にもしないものでも、あとで開いてみると、もとのままになっていた。

同じことをなんどもくり返して見たところで、かわりのあるはずはない。しかも、核をさしいれてから、眞珠になるまでには、少くとも四年はかかる。それが、くる年もくる年も、うまうまといかなかった。

村や町の者は、幸吉のむだばねをあざけり、そのゆめのよくな考えをわらった。

まわりの者から、どんなにあざけられ、からかわれても、その助力者となってくれたのは、つまのうめであった。うめは、「きつと成功します。世界のために、きつと、あなたの願いがかないます。」

こういつて、失望にせずむ幸吉を、なんどもはげました。

かないます。

こういつて、失望にせずむ幸吉を、なんどもはげました。

ある年のこと、赤しおが、おびただしく発生した。これは、

ある小さな生物が、海水いちめんにあふえて、海水が茶色に変わるほどになるのである。この赤しおのために、母貝はみな死んでしまった。これは、まったく考えてもみなかったことである。

かれは、新しく母貝を求めてきて、やりなおしにかかった。

町の入のかげ口は、いつそうはげしくなり、かれを氣ちがひ

とよび、やましとさえののしるようになった。

うめは、いつもこのわる口のたてとなつて、幸吉をかばい、

苦しみにたえて、なん年かをすごした。あるとき、うめが、母

貝の中をしらべているうちに、一つの半円形の眞珠を発見した。

これは、まえにさしいれておいた核によつて発生した半円眞

珠であることが、わかった。

「半円が真円になれば成功するのだ。半分までこぎつけた。あと半分だ。」

幸吉とうめは、たがいはげましあつた。それから、真珠貝の養殖の科学的研究がつづけられた。真珠貝にちようどよい海水の温度や、海の深さのこともわかり、しおの流れの早さや、えさのよいわるいなども、はつきりしてきた。

半円真珠が思いどおりに取れるようになったので、ひとまずこれを加工して、かざり物として、ともかく、世にだすようになった。

この光明を喜んだのもつかのま、幸吉の心からの助力者であつたうめが、この世をさってしまった。

そのうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。そのため、母貝

たうめが、この世をさつてしまった。

そのうえ、ふたたび、赤しおがよせてきた。そのため、母貝は、ほとんど死んでしまった。その数は、じつに八十五万にもおよんだ。

しかし、幸吉は、くじけはしなかった。研究のため、死貝を一つ一つ、ていねいにしらべていった。すると、かれはきゆうにとびあがった。

「あつた。あつた。」

ゆめにもわすれられない真円真珠が、光っているではないか。幸吉は、それこそ氣ちがいのようになって、死貝をどんどんみていった。すると、五つぶの真円真珠が現われた。八十五万から五つぶの真珠が取れたわけである。

「うめ、おまえも喜んでくれ。やつと真円真珠ができたよ。」

かれは、五つぶの眞珠をいまはなきうめのれいにささげて、その成功をしらせた。

そのころ、幸吉は、すでにしらがの老人になっていた。よる年なみにも負けず、研究を重ねたすえ、ついに核をさし入れるときに、ほかの母貝のがいとうまくを切り取ってきて、一種の手術をほどこすことを発見した。

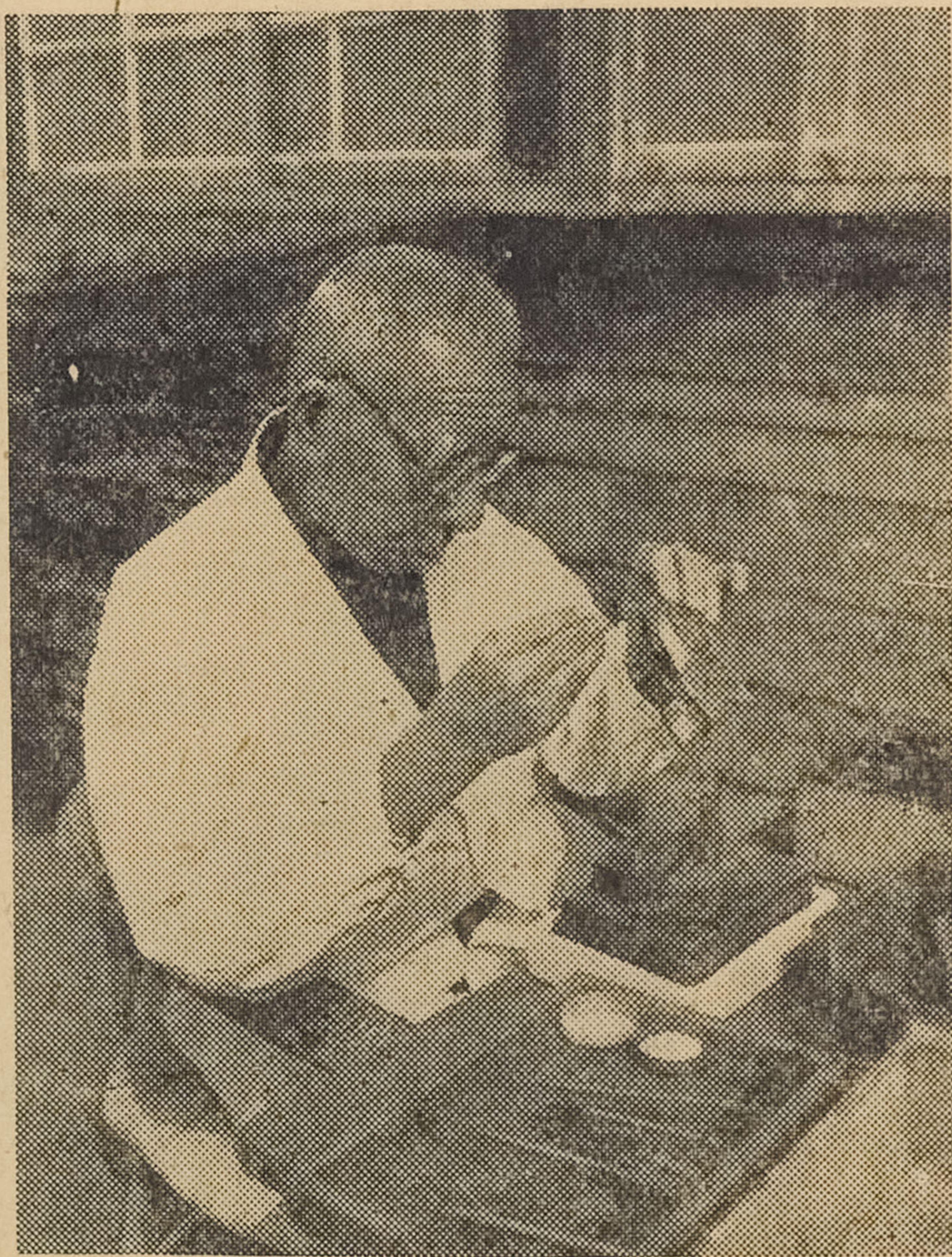
「これで成功しなければ。」

幸吉は、自信をもつて母貝を海中にはなった。さいわいに、赤しおもよせてこなかった。海水の温度に大きなかわりかたもなく、四年めになった。幸吉は、望みをかけた第一の母貝を開いてみた。はたして、眞円眞珠がやどっていた。第二、第三と母貝を開いていくと、どれにも眞珠が、きよらかにかがやいて

母貝を開いていくと、どれにも真珠が、きよらかにかがやいて

いるではないか。大きなゆめは実現された。

今日、真珠の産地は、ペルシア湾、セイロン島をはじめとして、オーストラリアや南洋の島々であるが、日本産のものは、ことに名高い。名高くなつたかげには、幸吉一生の苦心がひそんでいる。かつて、パリーの真珠商たちが、幸吉の手になる養殖真珠は、まがいものであるといった。しかし、世界の学者の研究によつて、天然真珠とまったく同じであることが、明らかにされた。



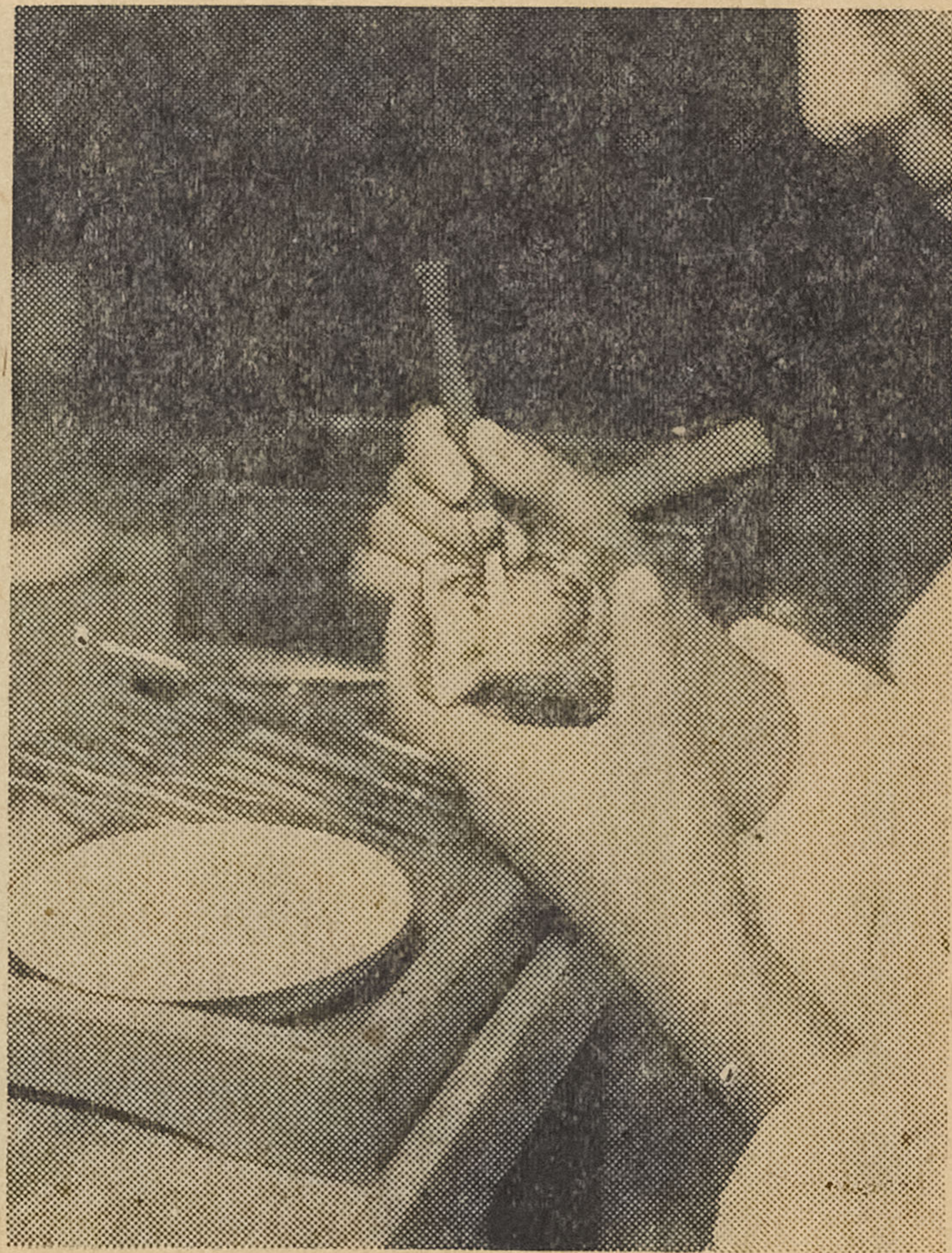
そののち、幸吉は、日ごろそんけいしていたエジソンのもとをたずねて、養殖真珠のつくりかたを、こまごまと話した。エジソンはたいへん喜んで、こういった。

「わたしが、研究所でどうしてもできなかつたことが、二つあります。一つは、ダイヤモンドであり、いま一つは、真珠でした。

あなたが自然をあいてとして、真珠を世界の人々にあたえたことに、心から敬意をささげます。

養殖真珠発明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とする

ならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしょ



養殖眞珠發明の、かがやかしい、あなたの光明を太陽とする

ならば、作製に失敗したわたしは、星にもあたらないでしよ
う。

六 私の妹

妹のことば

私は、きのう、三つになる——まんでいうと二年三ヶ月にな
る妹をつれて、さんぽにでました。

家から十二三分ばかり歩いたところに、廣い草原があるので、
そこへつれていこうと思ったのです。

ところが、私たちの足では十二三分のところですが、妹には

そうはいきませんでした。四十分もかかったのではないかと思
いました。これは、足がおそいというためばかりでなく、道ば
たにあるものを、なんでもみつけて、それに話しかけたり、そ
こで遊んだりしたからでした。

私は、べつにいそぐこともありませんでしたので、妹の氣の
すむようにして、つれてい
きました。

ためしに、私は、妹のいつ
ていることばを、紙きれに
書きとめてみたのです。

クロイ　ワンワン——キ
タナイ　ワンワンチャン



つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。

つぎの「ぶす」は、狂言の中の有名なものです。

狂言には、よく、太郎かじやと次郎じろうかじやが、現われます。

かれらは、だんなのねこかぶりをあばいたり、いたずらをした
り、また、とんでもないへまをやったり、だまされたりなど、
よわい人間のしそうなことを、なんでもやります。めうえのい
ばったものに対してもおおそれず、そうかといつて、なにをして
もにくまれぬ、おもしろい人物になつています。

狂言 「ぶす」

ある村に、けちんぼのだんながありました。おかみさんをも
らえば、くらしにもお金がかかり、着物をきせたり、おこづか
いをやったりしなければならぬので、ずっと、ひとりでくら

していました。

あるとき、このだんなは、用事で、となり村までいかなければなりません。でかけるとき、太郎かじや、次郎かじやというふたりの下男に、「よくるすをするのだぞ。」といいつけ、それから、きびしい声でいいました。

「おくのへやのおしいれには、『ぶす』といつて、おそろしいどくがはいっている。そちらからふいてくる風にあたつても、たちまち死ぬといわれるくらいだ。ふたりとも用心して、そばへもよらぬことだ。わかつたか。」

「はい、はい。わかりました。」

太郎かじやと次郎かじやは、声をそろえて返事をしました。

そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになつてはつまら

ないから、太郎かじやと次郎かじやは、はじめは、そのへやの

そんなおそろしいどくで、死ぬようなことになってはつまら

ないから、太郎かじやと次郎かじやは、はじめは、そのへやの方へは、顔も向けないようになっています。でも、こわいものはかえってみたくなります。それに、だんなは、ちよいちよいあのへやにはいるが、べつに、からだにさわりもしないのだから、自分たちも、そつと試ってみようということになりました。

「でも、風がどつきを運んできてはたいへんだから、次郎かじや、おまえは、せんすであおいで、風を向こうへやってくれ。」

「よしきた。」

次郎かじやは、こしからぬきとったせんすを、さらりと開きました。

「さあ、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

ふたりは、それをあいずのようにして、ぬき足さし足で、そつとおくのへやに近づき、さきに立った太郎かじやが、思いきつて、からかみをひきあげました。

「もつと強く、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

「もつと強く、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

次郎かじやのほうで、太郎かじやよりも、ずつとおくびよう者でした。それで、いよいよ、おしいれをあけるときになると、

「だいじようぶかい、あぶなくはないかい。」

と、ふるえ声でいいながら、いつでもにげだせるかつこうで、こしをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、あ

おぎつづけていました。

こしをうしろにひき、せんすの手だけをまえにつきだして、あ
おぎつづけていました。

そのうちに、太郎かじやは、おしおれのたなのすみに、だ
じそうにしまつてあつた。一つのまるいつぼをみつけ、へやの
まん中にかかえてきました。

「なにかはいつているとみえて、重たい。」

「それこそ、どくの『ぶすだよ。』」

「それなら、もう、ふたりとも、どつきにあたつて死んでいる
はずじゃないか。それが、死なないのだから、『ぶす』ではない。
」
「ふたを取ってみようか。」

「とんでもない。さあ、もとの場所において、あっちへいこう。
ぐずぐずしているうちに、どつきにあたるにちがない。」

「さあ、あおげ、あおげ。」

「あおぐ、あおぐ。」

思いきって、ふたをあけてみました。べつにとつきもたたず、かえって、うまさうなあまいにおいがして、黒っぽいものがはいつていました。

「こんなどくつてありはしない。ひとつ、たべてみようじやないか。」

「それだけはよしてくれ。なみたいていのどくではないから、かえって、うまさうにみえるのだよ。」

「かまわない、おれはたべてやる。」

ひきとめるひまもなく、太郎かじやは、すばやく指をつっこんで、すぐそれを、口に持つていきました。

「なあんだ、さとうだ。」

「へえ。」

「なあんだ。さとうだ。」

「へえ。」

おくびよう者が、きゆうにいきおいづき、せんすをほうりだして、自分も指をつっこみました。

「ほんに、これは上等の黒ざとうだ。」

ふたりは、かわりばんこに指をつっこみました。そうして、うまい、うまいとなめているうちに、つぼが、からつぼになつてしまいました。

「これは困った。だんなが帰ったら、どんな目にあわされるかわからない。」

おくびよう者の次郎かじやは、心配になりました。太郎かじやのほうは、氣が強いはかりでなく、わるぢえがあつたから、おちつきはらい。

「おれに、うまいくふうがある。」

どいいながら立ちあがり、いきなり、とこのまのりっぱなかけものをひきさきました。

「このうえそんならんぼうをしては、いつそうしかられるじやないか。」

「まあ、まかせておけ。それから、おまえは、だんながだいじにしているあの湯飲み茶わんを、庭石にたたきつける。」
こう、さしずをされて、しかたなく、ずっしりと重い、大きな湯飲み茶わんを、ふみ石の上で、ガチャンとくだいてしまいました。

そこへ、だんなが帰ってきました。すると、太郎かじやは、きゆうに両手で顔をおおい、おいおい大声をあげてなきだしま

——アンヨ、ナメテルワ——クツチケルヨ——フツテ——ハ

きゆうに両手で顔をおおい、 おいおい大声をあげてなきだしま

——アンヨ ナメテルワ——クツチケルヨ——フツテ——ハ
イ——イラナイノ——オハナシシテ——ワンワン——ミテル
ワ ウシロ——ワンワンチャン——モット——イコウ——ア
カチャン ネットルワ——ゴメンクダサイツテ——ハイツテク
ノヨ——ワンワンチャン ネットルワ——ワンワンチャン タ
ツチ シタ——オスワリ シタ——スイトウ モツテ——オ
モタイカラ モツテ イツテ アゲルノヨ——ワンワン タ
ツタ——ハナガ サイテル——キントツトガ——ア ドコヘ
イツタノ——イコウ——アツポ タイテル

よその人には、 なんのことが、 おそらくわからないうでしよ
が、 そのときのいきさつを知っている私には、 このことばの意
味がよくわかります。

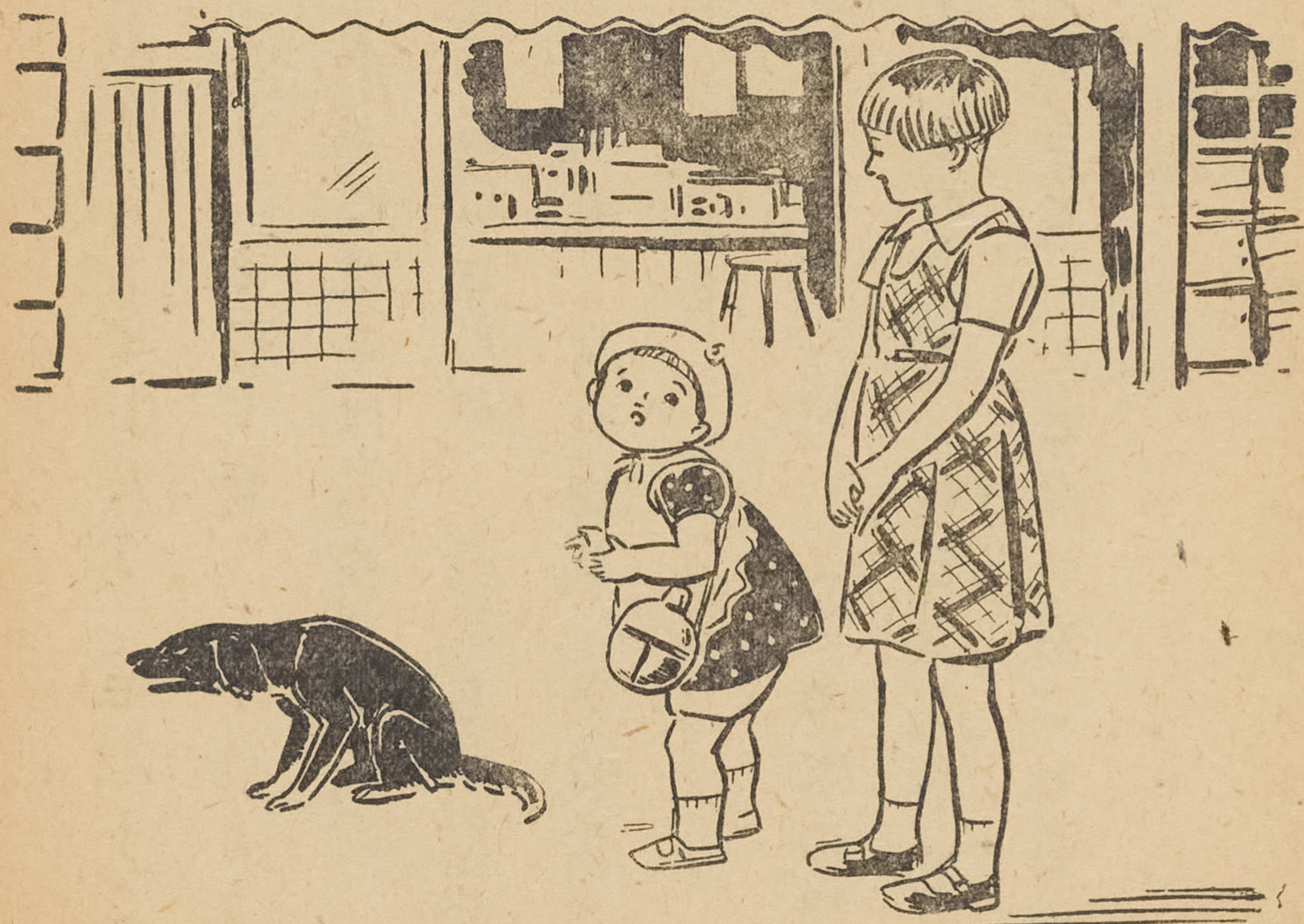
家からでてしばらくいくと、道のまん中に、黒いぬが一匹
きすわっていました。「グロイ ワンワン」は、そのときさげんだ
ことばです。その黒いぬに近よってみると、ひふ病にかかっ
ていて、顔のあたりの毛が、ぬけていました。「キタナイ ワン
ワンチャン」といったのは、そのためです。

黒いぬは、まえ足をあげたかと思うと、その足をなめたの
で、妹はびっくりして、「アンヨ ナメテルワ」といって、私に知
らせたのです。いぬは、うしろ足をもちあげて、せなかをかく
ようなかっこうをしました。「グツチケルヨ」は、足をせなかに「くっ
つけるよ。」というのです。そのとき、いぬは、くしやみのよう
なことをして、「ブツ」と息をはきました。妹は、わらいながら、
「ブツテ」と、ひとりごとをいいました。

母がこしらえてくださったパ

「ブツテ」と、ひとりごとをいいました。

母がこしらえてくださったパンを、ふくろからとりだして、いぬにやりながら、「ハイ」「ハイ」と、なんどもくり返しました。いぬは、まばたきをしたきりで、そのパンをたべようとしませんが、「イラナイ」といって、いぬにたずねているのです。やはり、いぬは、ふり向かないので、たべようように、「オハナシシテ」という心らしいのです。とうとう、くると、うしろを向いてしまっ



たわけです。

「ワンワンチャン」と、こちらを向かせようとしたり、「モット」ここで遊んでいたいと、私にねだったり、そのくせ、でかけようといひだしたりしていましたが、やっと歩きはじめました。

五六歩いったかと思うと、よそのおばさんが、あかちゃんをおんぶして、そばを通りました。みると、なるほど、「アカチャ
ン ネテルワ」でした。

妹は、また、ちよこちよこ歩きだしましたが、よその家の門の中へ、はいつていこうとします。そのとき、私をふり向いて、「ゴメンクダサイツテ ハイツテクノヨ」と、おとなびたことをい
いました。

門からもどつてきて、道にでたとき、あとをふり向きました。

すると、さっきの黒いぬが、ごろんと、地べたに横になって

いました。

門からもどつてきて、道にでたとき、あとをふり向き直りました。すると、さっきの黒いいぬが、ごろんと、地べたに横になってねそべっていました。「ワンワンチャン ネットルワ」といつていると、いぬがもつくりおきました。「ワンワンチャン タツチシタ」といつて喜びました。「オスワリシタ」と、いちいち、いぬの動作をことばにして喜びました。

そのとき、いままでかたにかけていたすいとうをはずして、手に持つといます。かたにかけると重いから手に持つのだと、ませたことをいつて、歩きだしました。まだ、いぬが氣にかかると、ふり向くと、いぬは、立ちあがって、のそりのそりと、どこかへいくところでした。

あきらめて歩きかけると、水おけがありました。そこに、すいれんの花が三つほど、きれいにさいていました。妹は、そこ

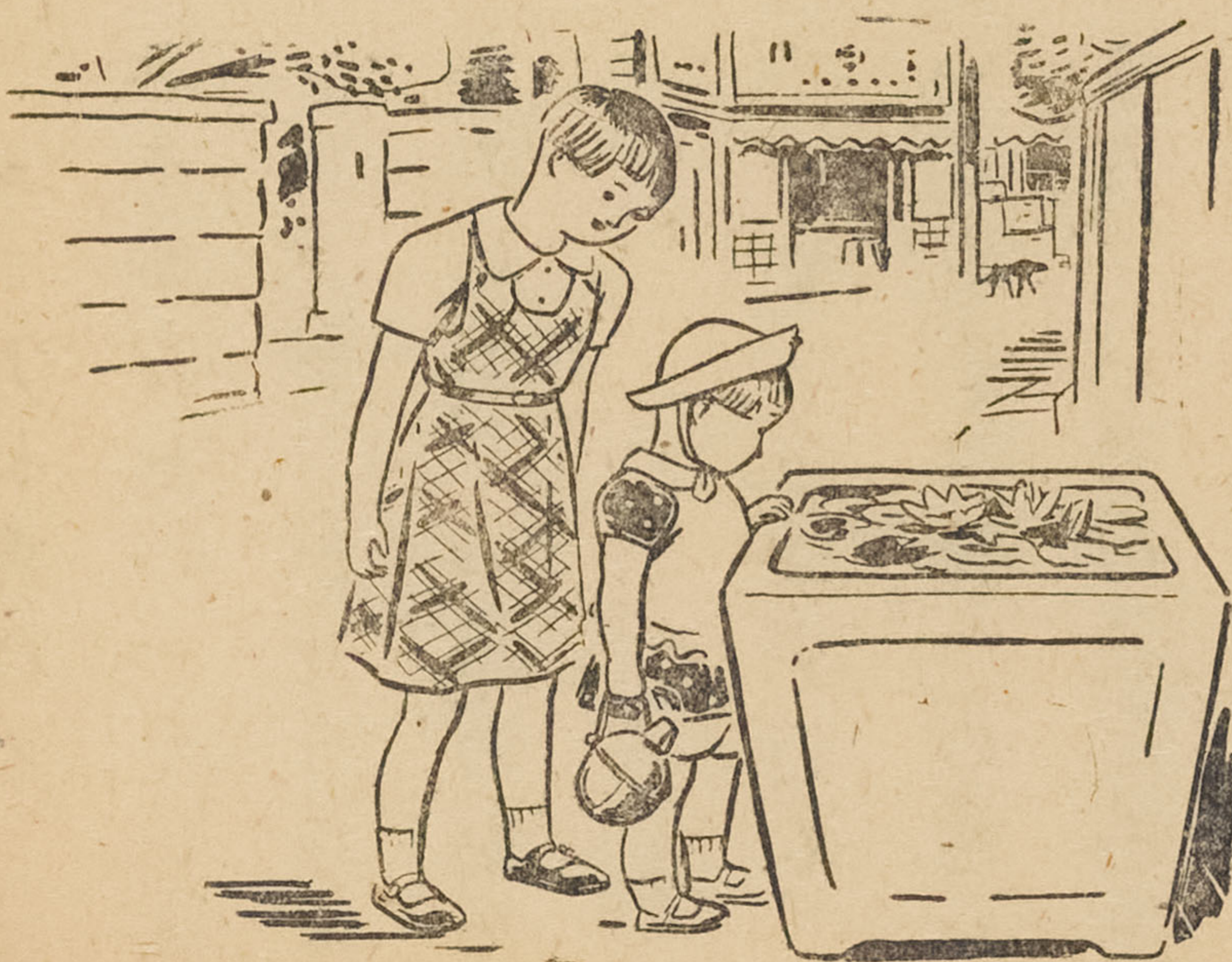
へいって、水おけのふちにつかまって、水の中をのぞきました。
きんぎよが一びき、すいすいとういてきたかと思うと、また、
すぐ水そこへもぐりました。「ハナガ サイテル」「キントツトガ

ア ドコヘ イッタノは、そのこと
をいいあらわしています。自分で、

「イコウ」ときめてあるきかけると、道
のわきで、たき火をしていました。

そのけむりやほのおがおもしろいら
しく、妹は、ここでまた、いろいろ
なものをながめるのです。

わずかのことばですが、この中に
は、妹のすがたが、ありありとうか



んでいます。七五三の記念写真も、思いではなるでしょうが、

は、妹のすがたが、ありありとうか

んでいます。七五三の記念写真も、思いではなるでしょうが、ことばの記ろくは、妹の心の写真になるのではないかと、ふと、こんなことを考えました。

新しい世界

このごろ、私は、作文がすらすらと書けなくなりました。

むりに書くと、自分がほんとうに思ったり、感じたり、考えたりしていることとは、ちがったものになります。

どうして、こんなふうにゆきづまってきたのでしょうか。思うことがどんどんと書けていたまえのころが、うらやましくさえなりました。

あるとき、なにげなく妹の作文をみました。なんと、わけも

なく、すらすらと書いていることでしよう。すこしのこだわりもなく、ぐんぐんと書きつけているその力に、おどろきました。かいこが、皮をぬいで新しく成長していくように、私も、ここで、いままでの作文のからをぬぎさつて、新しい世界にふみだしていかうと思います。

妹の作文

○ ふくろう

私は、遊び時間にふくろうをみにいきました。そうしたら、二年生の男の子が、ふくろうのからだを手でいじりました。ふくろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていつて

しまいました。

くろうは、目をくりくりさせて、とまり木の下におりていつて

しまいました。

男の子は、「おこった、おこった。」といつて喜びました。

○ コスモスの花

コスモスがさきました。

きれいにさきました。

白と、もも色と、こいもも色のが

さきました。

いまはきれいだけれど、コスモス

は、おじいさんになるとかわいそう

ね。



○ いちよりの葉

算数の時間に、先生が、はしごでいちよりの木にのぼって、いちよりの葉をたくさん落してくださいました。みんな負けずにひろいました。

うちに帰って、十まいずつたばにして、赤いひもでいわえて数えました。そうしたら、たばが十あって、五まいあまりました。

おとなりのよし子ちゃんと、なお子ちゃんに、三たばずつあげました。私は、のこったのをおし葉にしました。



ちやんに 三たはすつあけました 私
は、のこったのをおし葉にしました。

○ お月見

私が、「おかあさん、ただいま。」といって、学校から帰ると、
おかあさんが、

「ごはんをたべてから、すすきを取っておいで。」

とおっしゃった。ごは
んをたべてから、山の
方へ行って、たくさん
取ってきた。

えんがわにつくえを
だして、その上にすす
きをかざった。



月がでてきた。まんまるくてきれいだ。おかあさんに、

「そとへでて、あかちゃんにも、みせてあげて。」

といたら、おかあさんが、あかちゃんをだっこして、おもての通りへでていらっしやった。そうして、

「のんのさん、のんのさん。」

とおっしやった。私も、

「ほら、のんのさん、のんのさん。」

といて、月の方へ手をやったら、あかちゃんは、

「あ、あ、あ。」

といた。

○ たけのこ

うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。

○ たけのこ

うちのお庭に、たけのこが一本はえてきました。
私は、たけのこのそばにいつて、せいぐらべをしたら、はな
のところまでありました。あしたもあさつても、せいぐらべを
しますよ。

もう、たけのこは、
私のせいをすぎて、お
にいさんのせいより高
くなりました。もう、
先生のせいぐらい高く
なりました。

たけのこは、人間よりぐんぐん早く大きくなります。たけの



こは、 どうして、 あんなに早くのびるのでしょう。

きのう、 風がふいて、 ガサガサ音がしたから、 なんだろうと
思って、 二階の窓からそとをみたら、 大きな竹がによつきりで
ていたので、 びっくりしました。

もう、 親竹と同じくらいに高くなって、 風にゆれていました。

七 ぶす

能と狂言について

みなさんは、 能というものをみたことがありますか。 能を知
らない人でも、 おじいさんやおとうさんがおうたいになるうた

いを、 きいたことがあるでしょう。 能は、 そのうたいにつれて、

らない入でも、おじいさんやおとうさんがおうたいになるうた
いを、きいたことがあるでしょう。能は、そのうたいにつれて、
役者が美しい舞を舞ったり、さまざまなしぐさをしてたりするも
のですが、かぶきや、ほかのしばいとも、いろいろちがうところ
ろがあります。いちばんちがうところは、ふつうのしばいでは、
役者がおじいさんになったり、むすめになったり、わかい男に
なったりするときには、おしろいやべにでけしようをして、そ
の役らしく顔をこしらえあげるのですが、能のほうでは、めん
をつけます。

おじいさんのめん、おばあさんのめん、わかい男のめん、わ
かひ女のめんと、それぞれの人物によって、それぞれのめんが
あります。そのために、能は、めんの藝術ともいわれ、ヨーロッ
パの大むかしにさかえた、ギリシアの、同じめんの藝術とくら

べて、研究されています。

日本の絵画や、庭園や、建築にも、外国とはおもむきのちがったおもしろいものが、たくさんありますが、能は、その中でも、もつとも日本らしい、すぐれたところのあるものとなっていて、みなさんも、大きくなったら、自分たちの國が持っているこのよい藝術を味わうことを、喜ぶだろうと思います。

能といっしよに、狂言というものが演じられます。狂言はめんをつけません。そうして、能が、美しさを現わそうとするのどちがって、狂言は、ひにくや、あてこすりや、すっぱぬきや、ひやかしなどで、できているといつてもよく、それをみていると、世の中のうらおもてが、よくわかります。ことばも、能は、ゆう美ですが、狂言はそうではありません。

した。次郎かぢやも、そのままねをして、おいおいなきだしました。

と世の中の内から出てか、よくわがかりさういふ
ゆう美ですが、狂言はそうではありません。

した。次郎かじゃも、そのままねをして、おいおいなきだしました。

「いったい、ふたりともどうしたのだ。」

だんなは、あつけにとられてたずねました。太郎かじゃは、

なおも、おいおいなきながらいきました。

「じつは、だんなさまのおるすのあいだ、私どもは、すもうを

とって遊んでいました。私が負けて、ドサリとこのまにた

おれたはずみに、あのたいせつなかけものを、あのとおりひ

きさいてしまいました。次郎かじゃは力があまり、茶だなの

湯飲みをはねとばして、こなみじんにいたしました。あまり

の申しわけなさに、ふたりとも、命をすてておわびをしよう

と考え、それには、大どくとうかがいました。おそろしい『ぶ

す』をたべて死ぬのが、いちばん早道と思つたのです。が……」。

と、そこまで話したとき、いままでおいおいなっていたくせに、きゆうに、にっこりわらい顔になって、次郎かじやといっしょに歌いだしました。

「ひとくちくえども死にもせず、

ふたくちくえども死にもせず、

みくち、よくち、

ぶすはくえども、

死なれもせず。」

太郎かじやと次郎かじやは、こんな歌を歌いながらにげだしました。だんなは、おこつて、

「にがすものか、にがすものか。」
と追いかけてました。

と追いかけてました。

狂 (62)	際 (39)	才 (37)	衣 (33)	現 (24)	形 (20)	愛 (7)
藝 (63)	殖 (42)	珠 (37)	械 (34)	吸 (25)	院 (21)	呼 (8)
術 (63)	科 (42)	然 (38)	想 (34)	無 (31)	着 (21)	節 (9)
建 (64)	的 (42)	核 (39)	館 (35)	責 (31)	護 (21)	商 (14)
築 (64)	産 (45)	成 (39)	設 (35)	任 (31)	婦 (21)	暗 (18)
有 (65)	湾 (45)	功 (39)	凶 (35)	体 (32)	漁 (23)	読 (19)
対 (65)	敬 (46)	理 (39)	敗 (36)	部 (32)	坑 (24)	窓 (19)
等 (71)	能 (62)	論 (39)	試 (36)	織 (32)	員 (24)	円 (20)

78473

國語 第五学年 上
Approved by Ministry of Education
(Date Mar. 11, 1947)

昭和二十二年三月十一日 翻刻印刷
昭和二十二年三月二十日 翻刻發行
(昭和二十二年三月十一日 文部省檢査濟)

著作權所有

著作兼發行者

文 部 省

翻刻發行
兼印刷者

東京都北區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

印刷所

東京都北區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

發行所

東京都北區堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式會社

国立国語研究所



1000603819

60.0

o 24

上

603819